手本語

二十五

歌を名こそらし

Murasaki Shikibu

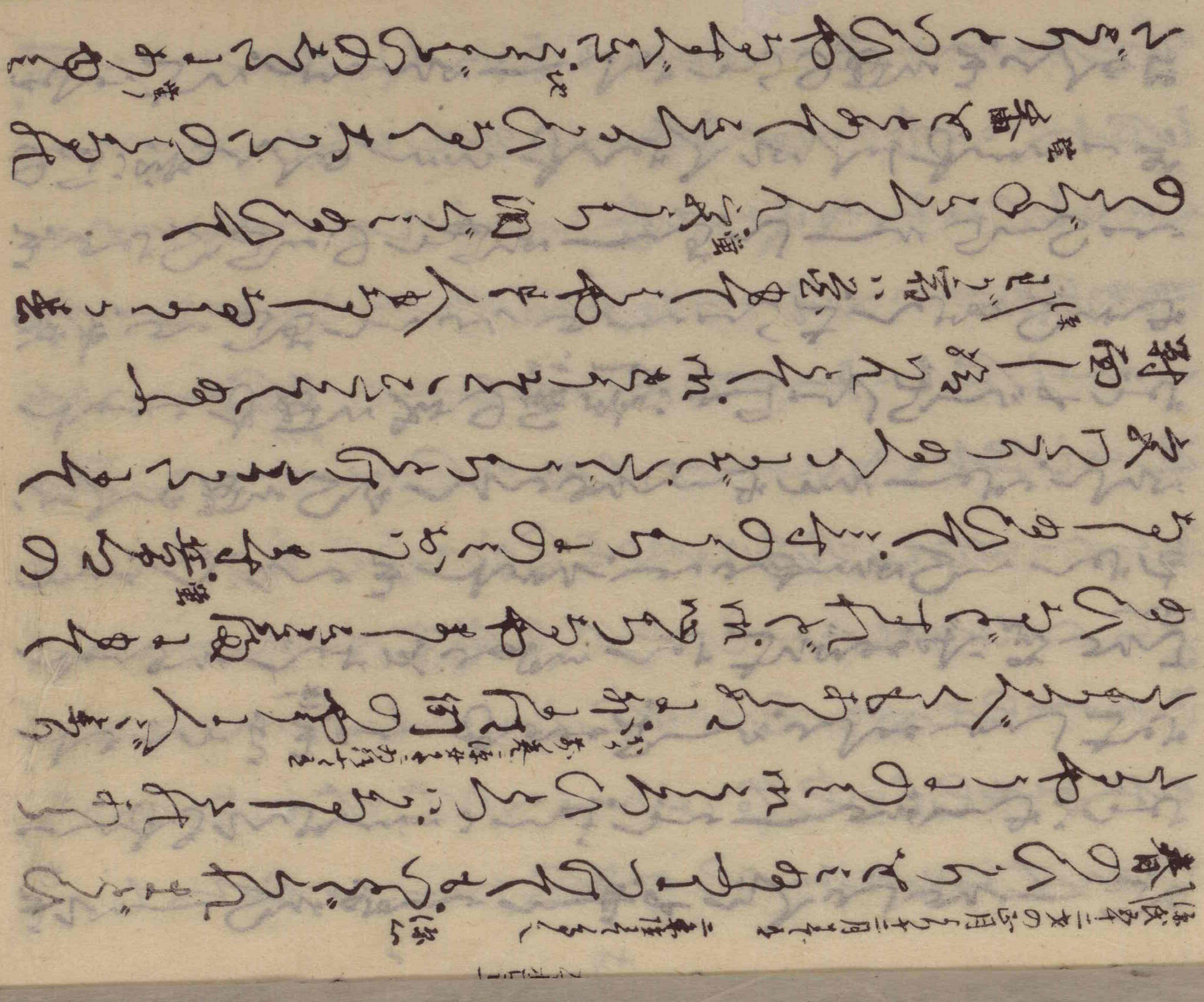
[v. 41]

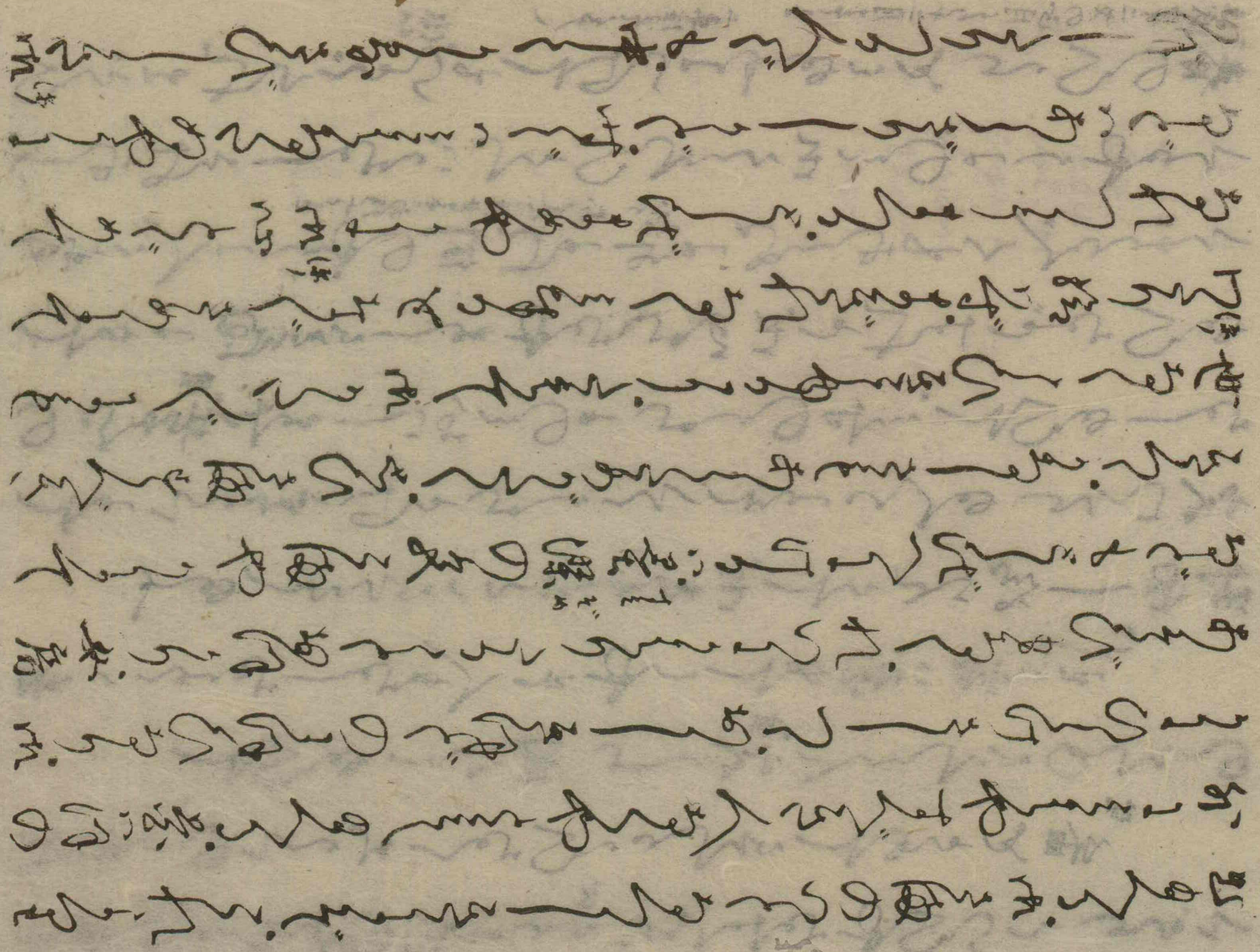
[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 41
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302





ひとりねにありて、いとおほぞうにまておし
めて、よるのれとのねなどにも、これれと何まるを、
おましのあたりひきさげつてさふしたをぬふ。
つれぐなるまゝに、いよ人への物紙なまどしたまふ
おりくもあり。名所なきれひだり心のふくなるを
りにつけても、さしをありたりまじりけり
ことにつけて、中ごろ抱うしめしう（紫ノ）おほしたる
気色の、時ぐ、こゝ給しなど紙覚し出るに、などて
こゝろふれにても、又まめやかに心ぐるしきことに
つけても、さやうなる心をこゝしなりそんなるごとにも
らしくじうおもせし此心ぞ人なるしかは。

人のゆき心もいとようえたりぬひちぐらしたんで
もて給ことはなりしかど。ひとつゝなげくも。
いかなるんとすらんと思しくらしますらしま
ても心をえぐりぬひかんことはいとおしうらや
しうおぼし給さ海。むすめよりもあまる心ちし給。
それありのことは心をもたりい海もちうつう
まつる人ぞはほのぐ写し出るまあり。入道の女三宮
けうちじめのへりしほどそれありはたゞ女は
史よいぐし給はざらしかどことうしかれけく
ちぢきなれけぞやと心のへりし気色の衰なり
しやまも雪ふりくらし暁(あかつき)よくちやすしひて戒男も

ひえ入やうにおぼしてぞのそしきたぐしかりしを
いとなつかしうおひかなるものから袖のいたう
なきぬらしぬへりけるをひきかくして、さめて
まぎらいしぬへりし程のうういなどを、取も
すぐし夏にも又いかなるせんかりかとおぼし
づけるに明ぼのにしもざうしにあるに女房
なるべしいうじうもいまりにける雪かれといふ紙
ぞつけぬへるにぞそれありのそちするにし、
うたまちのさびしきもいふかなくかなし
うき世には雪消なんとせひつてせひのほかる
なる紙ぞほどふる例のまぎらしにはしてうげ

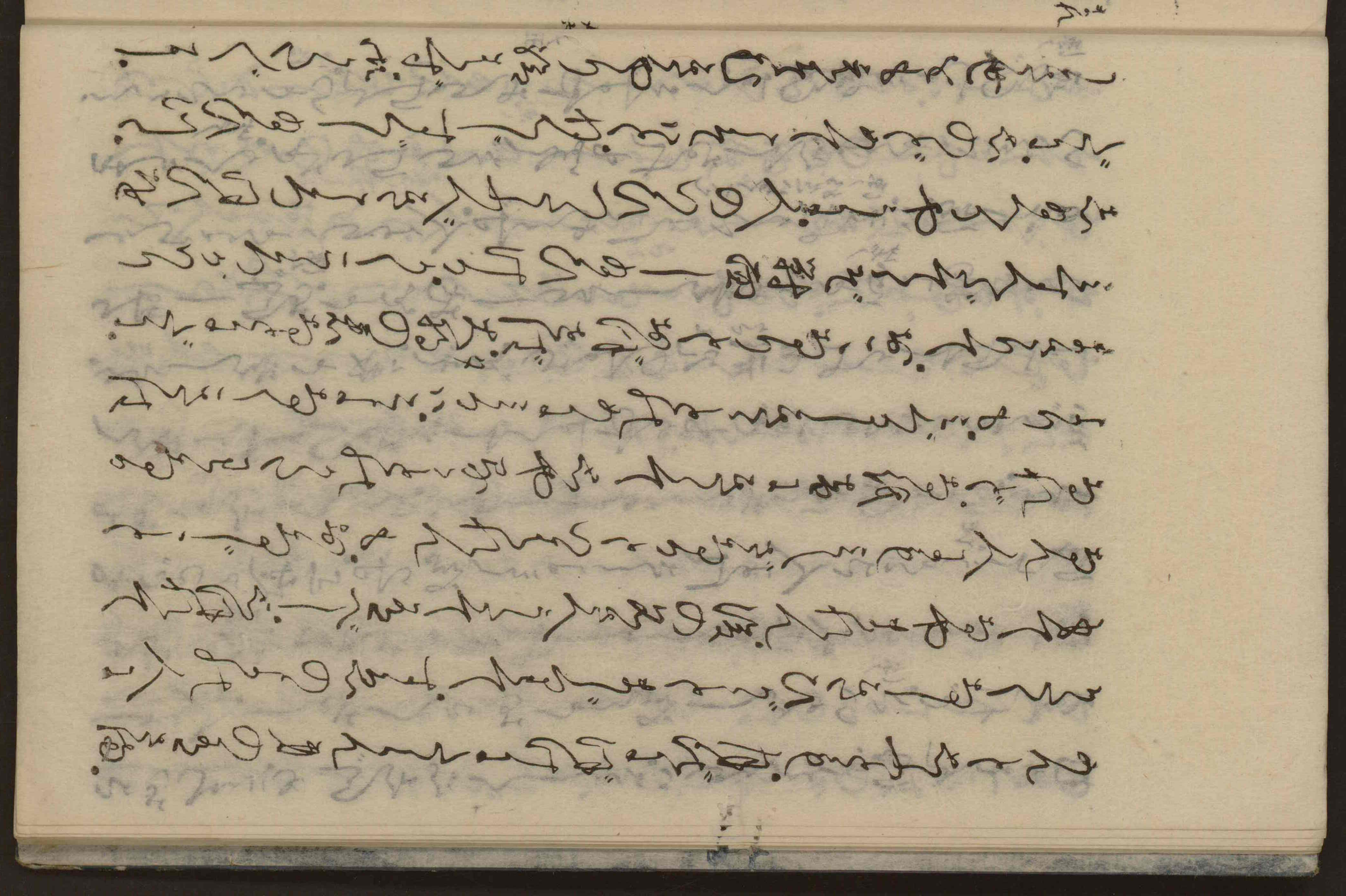
めしてどこなひぬふうづこうる火おこし出て此火
とけまいらす中訓云の志中務のきこちぞおまん
ちくれ物語ことも独れつゐよりもさびしうり
つる夜のさ面れ。くてもいとよくしすまし川
べりけるせとちるくもくづくひけるれと。
うちなげめ語我さへうち捨てはこの人ぞのいとぞ
なげきまびんことれ長はいとおしうべきなどこ
ひとしぬふ志のびやはうちをとなひつ。望ちぞ
よこぬへり此声をよろしうおもちんるまして
ぞる洞とまるまじ云紙まして袖の志ぐうこをさ
おんけまでおもれは明書こまる人ぞの心ちつき

きずしきしも。このせまつけてはあらずしらべき
ことおきくきまじ。こうきまは生れちがら。
又人よりもとよ。口ぬしき契にもきけかれと。
しふことこそ。世れもうちくうきをしらすべく。仏
おどのをきてゐへる身ちるべし。それをしゐて
しらぬがかはちかしゐれば。くいまものみちう
きすゑ。いうじきことのとぢめ紙こけるゝ。
すくきれほども。こづくのうろのさいも。ありちく
こもてしうろやすきま。いまちん家のほどしなく
ちりまうるとこれかれうくて。おりしよりけま
めちらす人ぐのいまはとてゆきけれん程こそ。

いま一きはの心こゝぞれぬべかれ。いとゝなりしかし。
ひろかりける心の程なるとて。此(比)めをしのごひく
し給ふ。まゝぞれずやがてこゝぞ此間とこゝなる
(女ざうを)
へぐ。まゝしてきさとめんかゝなし。さて(ん)打捨られ
まりなんがうれしさ紙とのくうち出まゐし
されど。さもえ罪ぐ。むきへりてやこゝぬ。(源ノ)くの(比)こ
なげきありしのへる明ぼのなぐめくしのへる
多嘗などれ。しかやかなるありくもかれをし
なべてまは常しくざり(らイ)しへぐと。おまへらう
くてかやうの此抄紙などしのふ。(源ノ女ざうに)中将の君とて
ゝしふ。まゝちいくくよりこ(源ノ)のひなれしを。いと

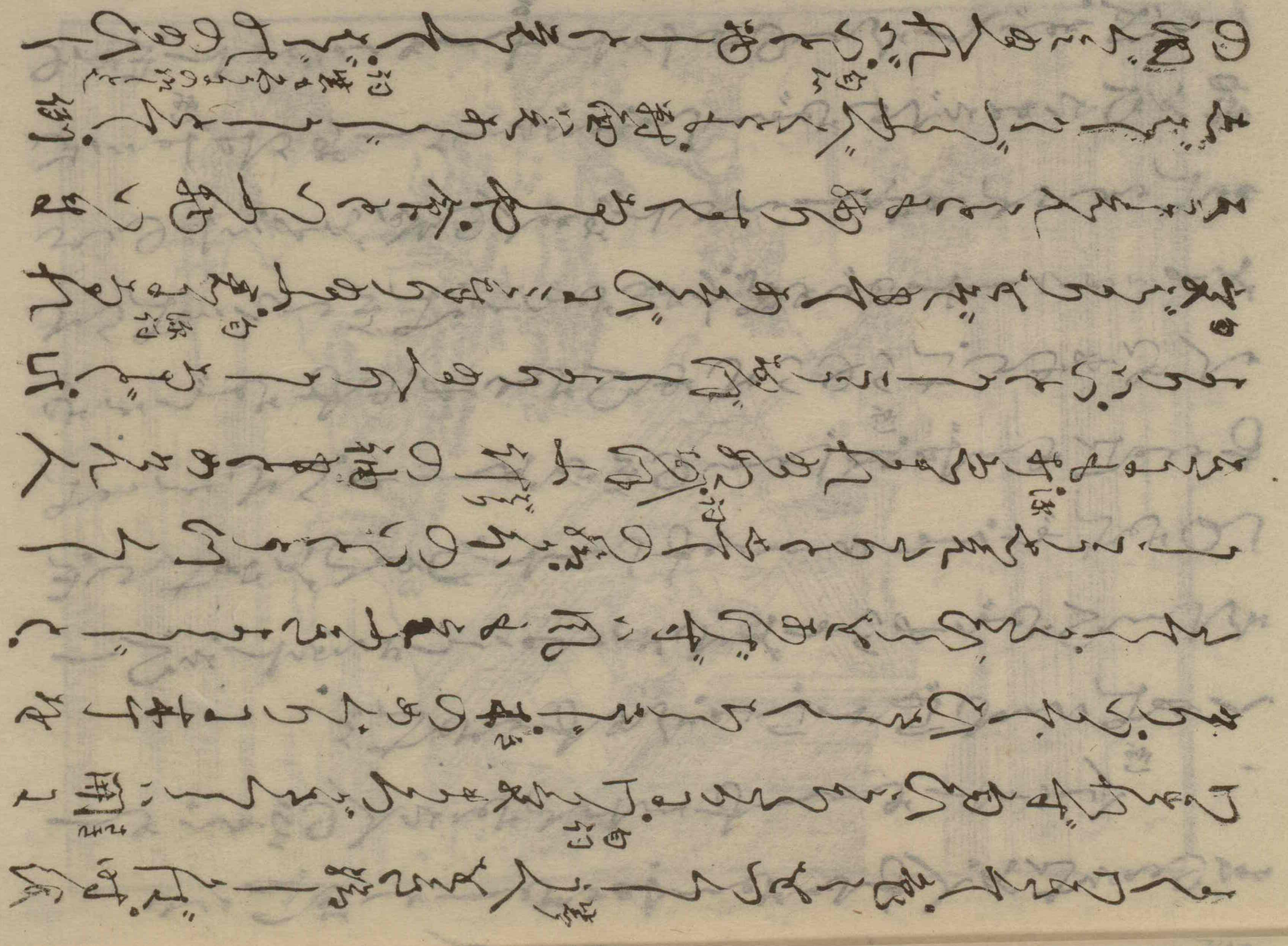
思(源ノ)びつゝこゝゐひすぐさずやありけん。いとゝかたはらゝ
いたきゝとしてゐれも罪ぐりけるを。(紫ノ)かくうを
ゐて後ハ。それ(源ノ好色ハ多くても)かたはあらず。人よりゝとまらう
ゝさ袖ゝ心(紫ノ)とゞめ覚しかりし袖をとゞ(源ノ)おぼし出る
ゝつけてゝかれ此形見(かたみ)のすぢをぞ。衣と覚しかる。
心ぢをかたちなどもめやすくてゝうるひまゝ覚て
ゝろけまひたゞおもしかりハらうくしとおも
ほしうとさ(地)人まはさしゝこそ給ひず。上達ゝあるども
むつましき。又此もしかれ変たちなど。(一段)なほ来り
ゐれどゝ(源ノ)いかしく給ひとおさしゐし。(ん)人ゝり
むかもんほどぞろハさゝしくしきびめこゝろおさ

のんとせふとも。月ばなばけまたんのまさ面。
うたくあしきひがとまじまて。すゑのよれ人に
まてあやまれん。後のゑさへうてまべし。ぶれて
あん人まもこしざあるといられんもあるじこと
あれど。あ紙者にまうて。ぶやふことれうたまある
よりも。ぶくしきくとれめまこうハこよあくこさは
まさりて。おこありとおばきば。大ゆの恵あとまぶる。
こすへぞそくぞ。對面しぬひけうかくこうろかりり
志ぬへうやうな。人のいひつたふべきころはひを
ぶる。ぶのどめてこそいとかくじすぐしぬひけり。
うさせともそそむきやり給まず。此うたぐる。

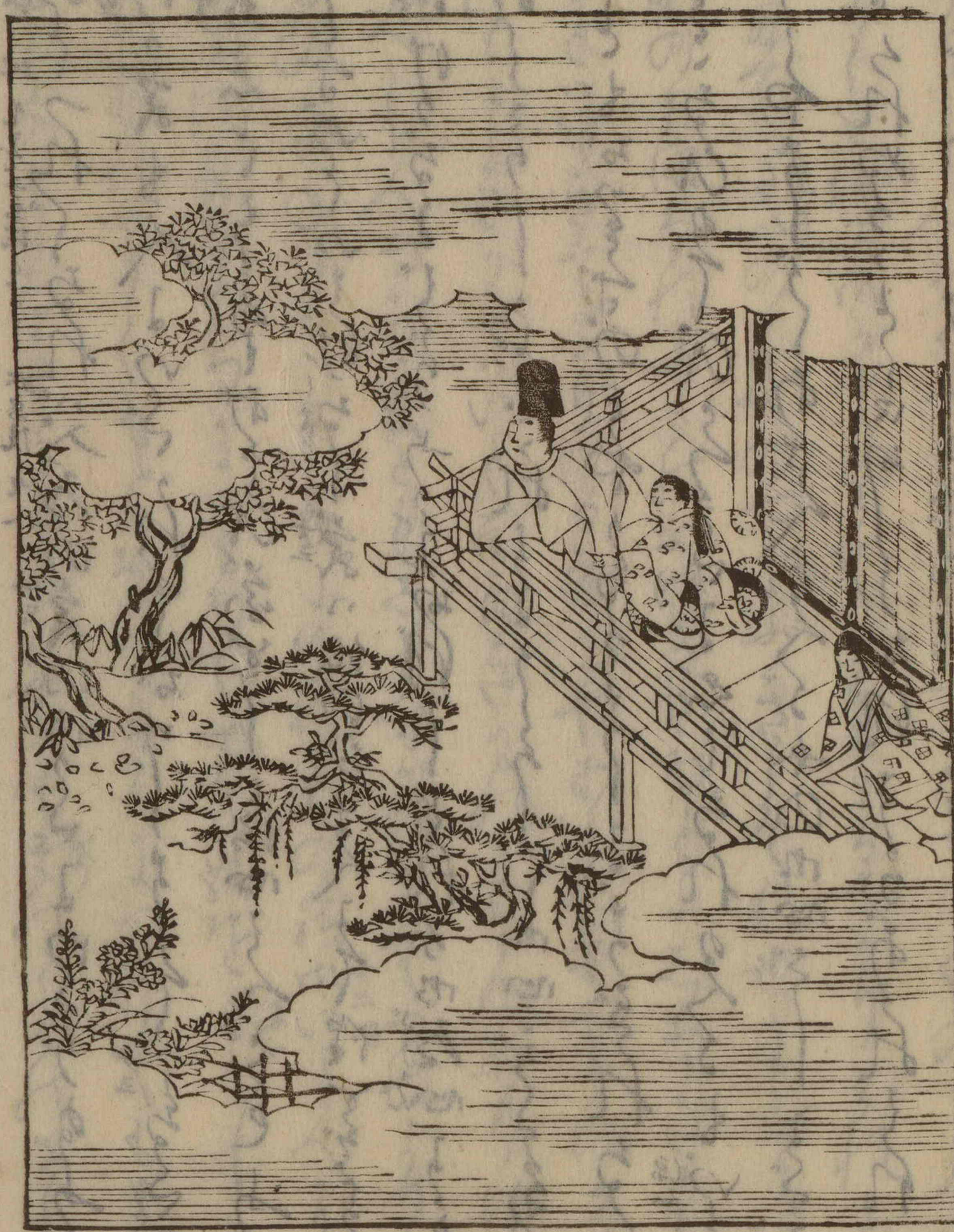


稀(まれ)にもうちはのめきぬふまつけていえいとせき
ぞさき洞のあめのこゝろりまされば。いとつりあくて。
いづくにもおぼつかなきさ夜にてゐし給。(明石中宮)(地)さきいの
家いうち(今に)まいしをなて。この家(白)をぞさうぐしさき
れあくさめにはおいしまきせこまひけるぞ(紫)乃
のなひしらばとて。(紫ノ方ニ二条院ヲ云ヘ)こいのおまへの紅梅。とりつきて
うしろもありき(白ノ)なへるはいと(添ん)衣とこそてまつり
給。(地)ぎきしぞるあれば。宮のまだのさうりにあるも。
まぐしきも本来ありしう霜つけるに。かれ此
形見のこうもいに。萬のもちやうにあるさせられば。
(添ノ)こちはてゆくんぞ

係うへてこし菜のあるじまなき宿にしらずが
よそにあり萬地とうそにあきありを給ふ歟
りまくにおまへのあ様いとしへりかもしぬを
めでぬふるにはあらねどしげ心なくなるにとる
つけてもむすひいたりおぼさるれば大かるこの世の
外のやうに鳥の者もきてしざらん山のみすゑ
しうのこいとぐ歟まさりぬふ山ぶきなどの心ち
よげに咲こぼれたるもうちつける家けくのこ
これされぬふ得かれ菜は一重ちりて八重さく菜
様さりすぎてかぎ様はひらけ敬はをられていろ
つきなどしていすあるをそのをそくとき菜の心を



ことに。まがくしうのぬふとて。ぶし(地)めるなりて。れぞの
袖をひきまさぐりなどして。まぎらりしおりす。(源)すこ乃
まれかうらんまをしかりて。おまへの座ともこすのうち
ともこまうしてながめ給。女房などもかれれかくこれいろ
へぬもありれいのいろおひなるもおやなどもか
やかまはあらず。(源)身づからのれなをしもいろもよれ
つまなれど。ことさしまやつして。むもんとなれりれ
しろしひなどもいとをろそかまことそぎて。さびし
くもれころばそげに。しめやかなれば
(源)今いとてあらしやもてんなさへの心とぐめし
しのうさねを。人やるなしぎかなしうおぼさる



いとつれづれなれば入道の宮の御かたはつかうまつる
けり宮も人はいづかれてかりしまして、こちたの
若ぎ君ともしるもあさび、菜をしこう給心ぞへどもかう
りず、いといまけなし、宮は仏のおまへまで御をぞよそ
給けり、なまじかりかうおぼしとれる御心ぞ
あらざりしかど、これよりまさりしく御心こそなく
ともおいまず、のどやかなるまゝに、まうぞれなく
とこなひまて、ひとつゝにふしたまれのへるもいと
しやましかくあさへのへる女の御心ぞしまぐに、
とかれぬるゝとにおしうおぼさるか、あるれまれの
夕ぐへしていと面白くこゝあれど、去にこゝろよせ

こりし人なくて、菜の女すさまじくのみ見れ
さらしを、伝(詞)の此かぎりまてこそこうべかりかれと
のめて、ふいのまへのやまぶきこそ、我世まこしぬ
菜のさ面なれ、ふさ此おほきさなどよ、志ちまるかう
などいなきてざりけり菜まやあらん、菜やかにまざ
けしきかるいと面白きもれまなんありけり。
うへし人なさ、去ともさしらずがほまてつねよりも
白ひかさゐこそ、衣に侍れとの給、此(女三詞)いへり。
答には去もとなるに心もなく笑し給を、ことしも(源心)
こそあれ、心うくもとおぼさるにつけても、まづ
かやうのまちなさことにつけても、ぞ(紫)れことれさら

てもありそんしとさつまさぶふ姫しなくても
やミましゝなると。いもけなりしほどよりの所
ありさ面を。いでなるごとぞやありしとおぼし
出るゝはまづそれおりれおりかどくさうらうく
じうぶほひおほうりしうろざ面。もてなし
ことの葉のミおもひつでけれさまふり。れい
のなえぞのもろさは。ふとこぼれいでぬるを
いとくるし。地ゞ薯の露んぬどくしう。おしき程
なれば。やがてありし此方ゝ。ほノ口くりぬへり。久しう
さしものぞき給ぬ。おほ(明石ツ)しなきおりなれば。うち
おどろかれど。さ面ようけもひらろまくもて

つけて犯人をはなちつれとも経はつけてた。
又りうぎ疫をはおそてこそゆへにしき色もておもし
まへりしうと、おぼしくへからうまておもげは
こひしうらうしきれとまされば、ゆるうしてもすぐ
さむべき心そといふらんべからしとおもふまては
のどやかなる音楽あらし法人をあられところどく
めれはいとゞあるべきこともいふしへうきおもひ
ひえそてすべていかなるもこの世にしうと
まるべきこともちくさいろゝひさせしはあちなくの
せなつけてかのいろづしはきふれかへうりし比
あひおもはしめたる後うちかぶ風にさめてうしきえり令

ともづりかけべく峰山の麓にかゞりうたれぬ。
こゝろざしあらまじうちんとおもひしを、すゝむ思の
世は今のうきかりの身じちうきおそしも。あなかま
じきほどもおもはゞづしのぞいまぞすぐし
てげうがこゝろぎもありまじくしゝさしおはじ。さして
一まどの為しきまの心はの様子じ。覚しこう 吟君心
さ後のことゝりは心ぐるしき旅。うしおしうさ
まりて大かるとの人めはおもはむらおしげなるさ人 詞
ぶは心の内の程ぐしなき旅づしおほうほうちかう旅。
まして いかでかはとこやすくもおぼしますてん。
さやうにおもへこゝろざしはかくありてうちぐしける。

もどこしたるどもたちまて。なかくなることなど
侍りなりせ。是しろほどにぶきやうに侍らんやまた
つねにすきまてさせ給ふるかうに侍らんと。さやう
れ侍りてこそいふ人のためしなどを学侍りけ
けても。心にかどろかれ。さふよりこゝふ嫌しありて。
世をいとふつねでになりとうそれいなをつるさ
ことこそ。なほ紙志ばしなばしのどめさせまて。宮
たちなどもおとなびさせぬひ。まことにうこゝさ
なりなべきれ。其様に。三年りなさせ。ゝ夜りんまでこ。
こゝれなく侍らんこそ。心やすくもうれしくも侍り
べきれなどいとおとなびて。学しろかしさいと

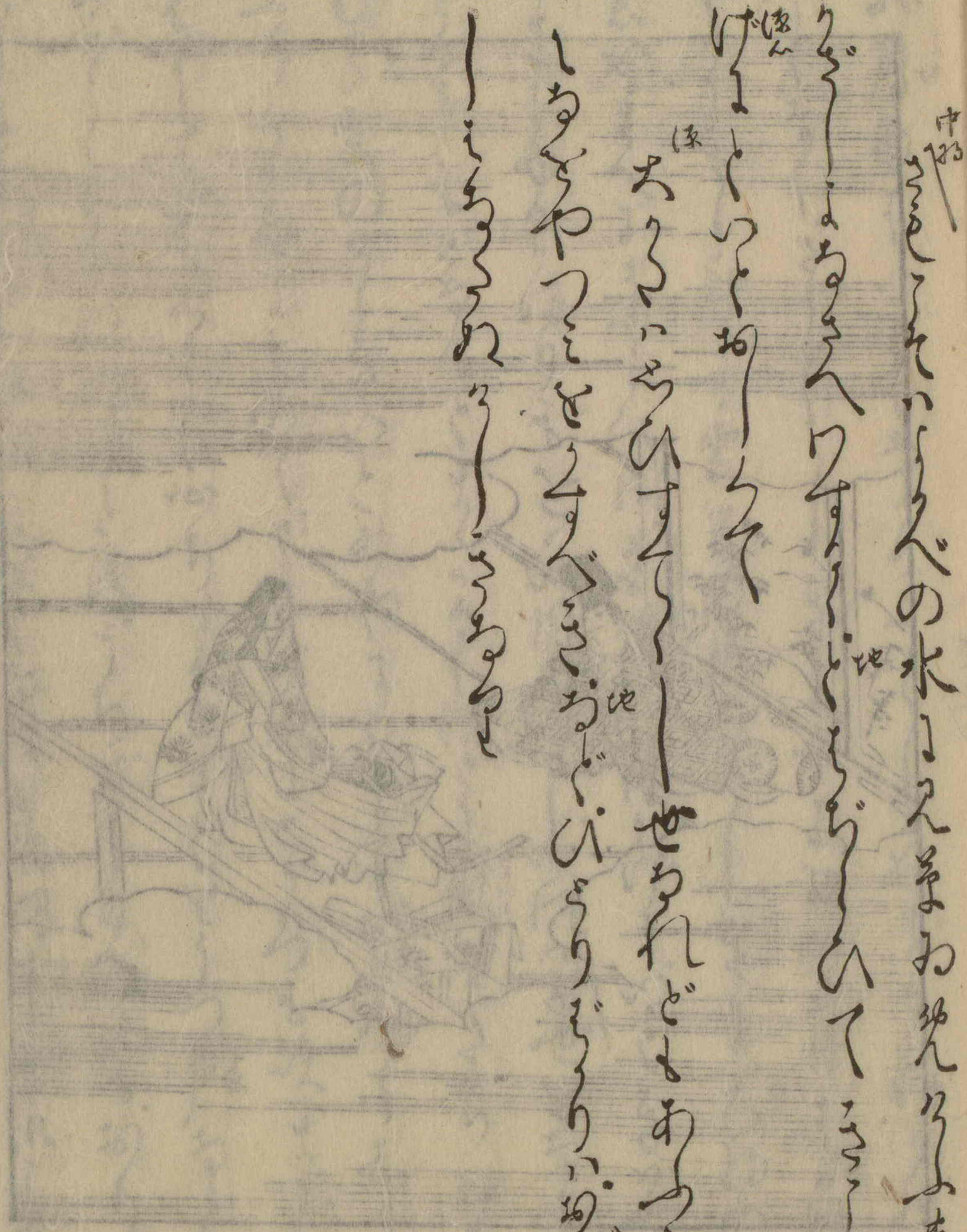
めやすしさまで（活付）しのどめん心あるさこそおさまさま
をとりぬべかれなどのなて昔よりも此をしふこと
などかたり前後中に（有つが）おさまさいの家のうへれぬへりし
恵なんまれのいろをそてもまことに心あらばと
おぼししそれは大かたの世につけておしかりし
此まで様をおさまくよりこまりしてさらとぢめれ
うなしさも人よりとまおぼししなりこゝろ
とりけく心ざしましも抱の衣はよしぬけざやとし
へぬかへなをられて心おさめんかたなくしれがた
さもふぐかう中のあしされこまはあらず おさ
なまこ様よりおしこそしまさ雨もろともに

老ぬるすゑの世にうち捨られて、ワ身も人の身を
ゑつゞけしかなしされたへがたきかりなん。すべ
てもれく衰も、ゆへあることをもおしきすぢも、
ひろうさめづらす。うたぐきふことれ、おさうしぞ
なるになんありけるなど、衰(他)ふるまで、昔今の此
抽紙にかくてもありしのべき衰をとゝ思しながら、
えり給を、女(略)も抽衰にさふべし。(源)まが此心にも、おや
しくも女にけるなし。見しきしたるさてもまた
例の此をこなひに、衰中に女てぞひるのおましに
いとかりそめにようなし給ひ、めて此文(略)なり給に
(源)なくしくも物りましられかりの世をいづくを

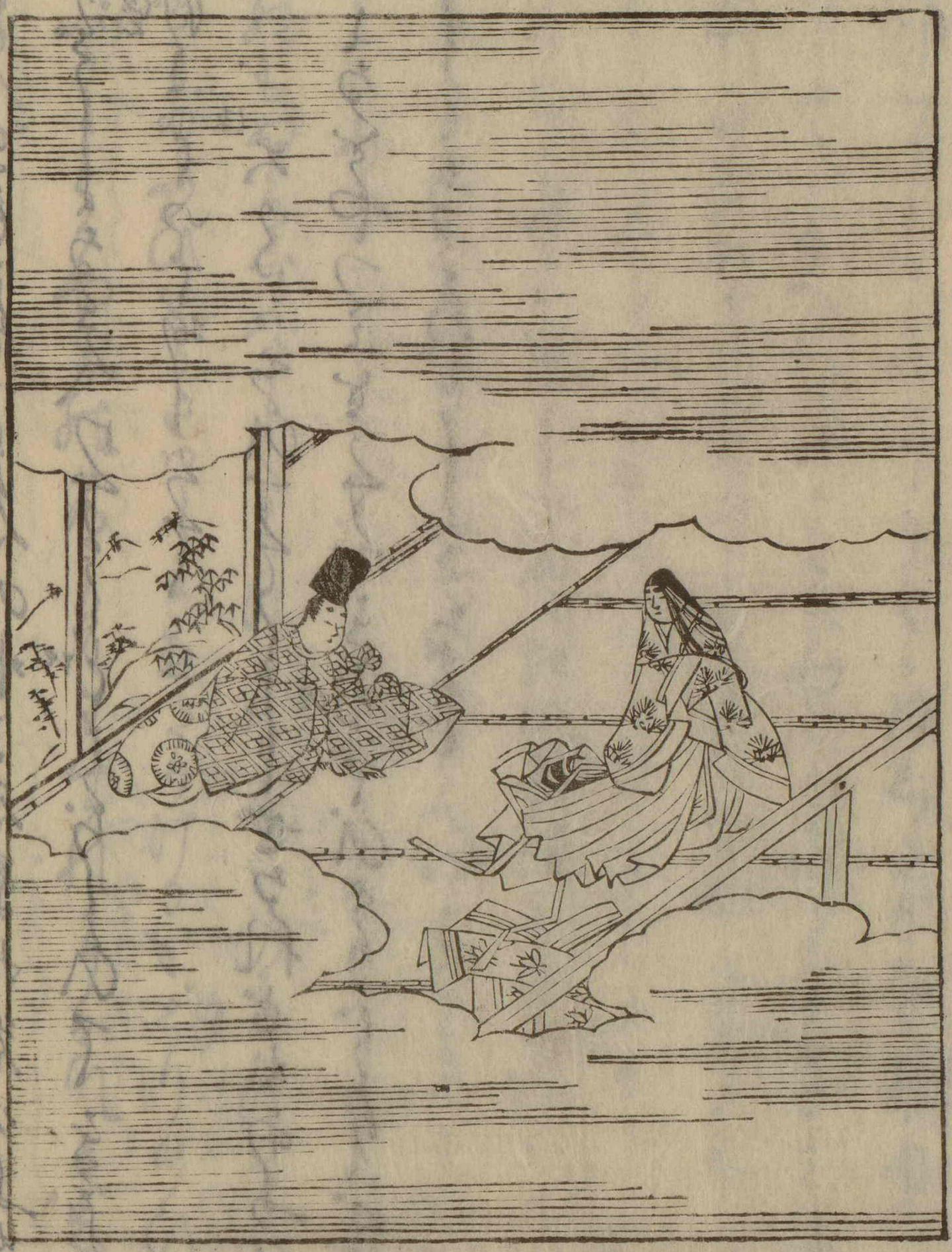
つゐのとゝまちしぬ。よ(昭名ん)べのれありさ面をしうら
めしげなりしうど。いとうくあらぬさ面ま。おぼし
ほれたる御気色の心ぐるしさま。身のよもさしを
うれて。おもぐぐなれぬふ
(昭名)うりがねし苗代(なわしろ)水(ぢ)のそしよりうつりし
菜のうげをぐまこず。ふ(添ん)りがくうよしあるう(昭名ノ)さぎ面
まもお面めぎ面をきまれま(第ノ)しうりしを。東乃
世まはうくゝま心ぢをとゝしなどちまて。うしろ
やすきうまはうちこれむべくむかりし給ちがら。
まゝうりとてひくあるまちとけず。ゆへまて
そなしまへりし心をまてを。へいさしもまゝら

さりきましなどもしいづ(地)をめてさりぐしさ
時はかやうにくだ大りくさようちほのめき給おこも
あり。昔のれを信にはいかなるべし。夜のれ
(花ちり)りこより。れ衣がへのれ(さりぞく)裏束なり給とて
(花ちり)夜衣たちかへてげりそふだらかゆきさひも
すくしやもちをぬれ返し
(源)羽衣のうすきにかけりそふよりは(もち)(花)蝶の世ぞ
いとゞかなしき。(まつり)(地)祭の日いとつれぐまてかふを抱
うりとて。へぐ心ちよげなんうしとてこや(笑歌ノ)もろ乃
をさ夜なぐ(源)見しやり。(詞)女房などいとりさうぐ
しかん。里に遊びて出えようしなどの給。(源)中(おなひ人)の

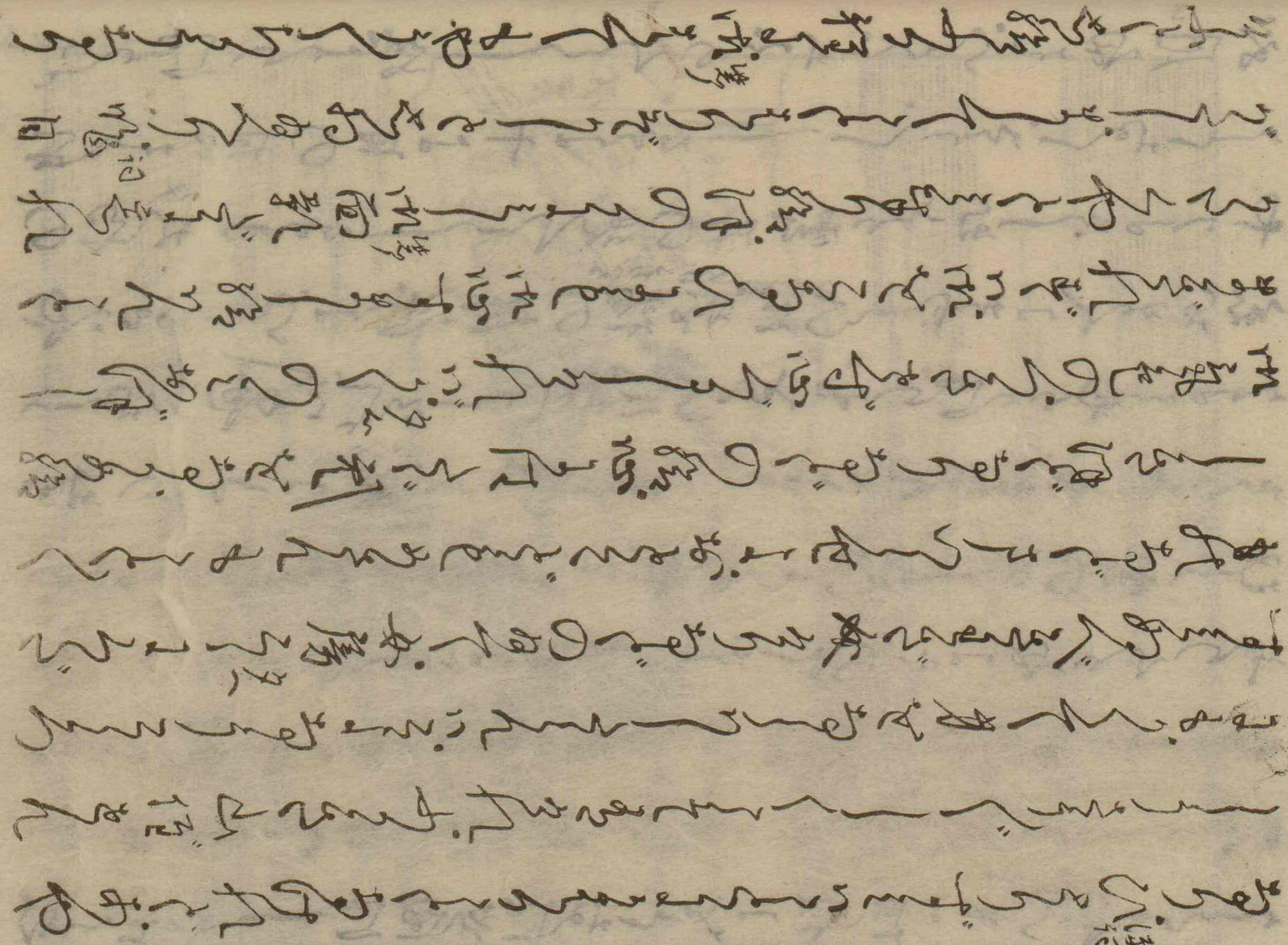
云ひんぐしおもてまうくわしろうを。(清ノ)おゆゑ
おりしてこゑんれバいとさぐやうまおりしさき海
しておきあがりうりつくさきちやうりゐひ
うゐれもてうくしてすくしふくぐゑうゐの
うりあどいとおりしげや紅のきばゑうけそひ
うちう夜ふまんざういろのひとへいとうきまび
夜まくろきあどうりしぐうきありて。もりう
きぬもぬきすべしうりけうを。さくひきけるど
すうまおふひとうるゐ並うりけるど。(清ノ)さりぬひ
ていうまとうや。これ名そますれりゐしと。出
へまへハ



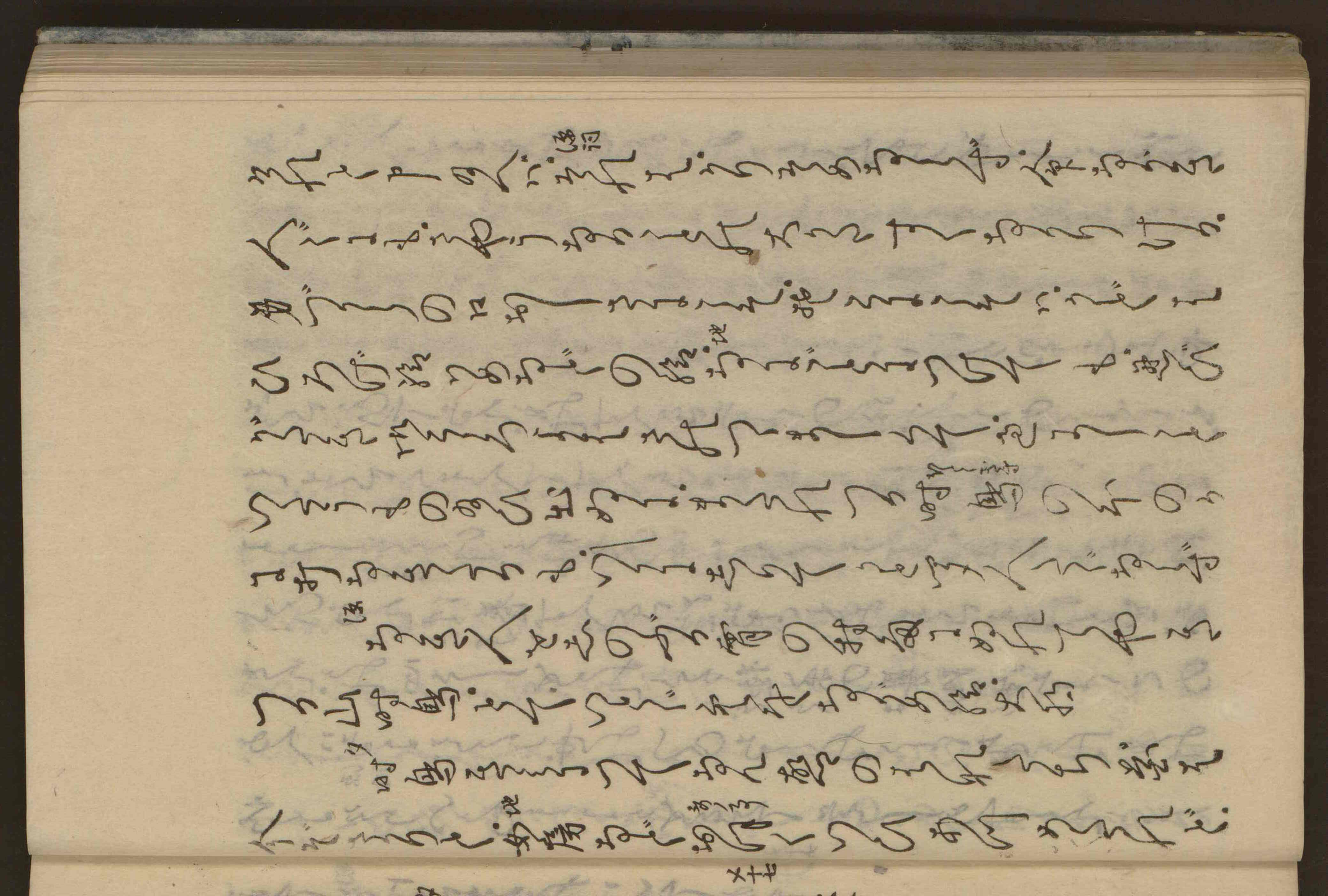
中将 さもこそはいふんべの水に見まゐ光ふ志
りぞしよちるさへりすすとどもちぢしひてきこ白
げ 流ん よといとおしらんて
大 流 うるはちひすてしせられどもあふひ
しるをやつこをうすべきおどひとりぞうりはおぼ
しこちるぬかしきちるを



文月もはやくなかばすぎ給ふよりはや
くれぬ。ころしもあれ十五日の月きよく
やうやうさし出る雲居のけしきにも夕の
恋しさまさり給ひ給ひ、楼のほとりにつとや
なまめかしうほのかにも見えたれば、女世をあはれ
きり声もきこえんとおもふほどに紙まくら
むら雲のたなびきいとおもしろくておぼろにて
かかる夜はそぞろに吹風にさそはるる松など
ちりて花の心ちするに松虫などの声など
めづらしうあはれにうちずんじ給へるもあはれ
とりどりや垣ねにそよぎ世をはかなしと思



ゆるかりいかやうにかをさて是しめすとんとゆ
ゑへばおまだかり世れつゝあらぬことをかはまれ
（源詞）
まんかれ心ざしをかれしろ極（ぞくらく）系の男（まざら）雅などこの
こびなん諸（くやう）養ずべき雅などもおまるをけりを。お
まがしそうげ（詞とるあり）これその心くもしうずをさくなれ
ぢまくくもへてすべきことぞも皮（そうづ）諸（詞とるあり）部のいりんに
あたがひてなん。もれすべきなどの給（夕詞）かやうのことぞも。
もとよりとりくてあげしをさてげりかうしろや
すきつぎなれど。この世にかりそめれれちぎりなり
そりとこゝぬふにかゝること（世ノ諸子ノなきなり）いふぞうりとぞ先ゐてて
ゐへる人ぞにもれ志給ひぬこそくちあしうゆり



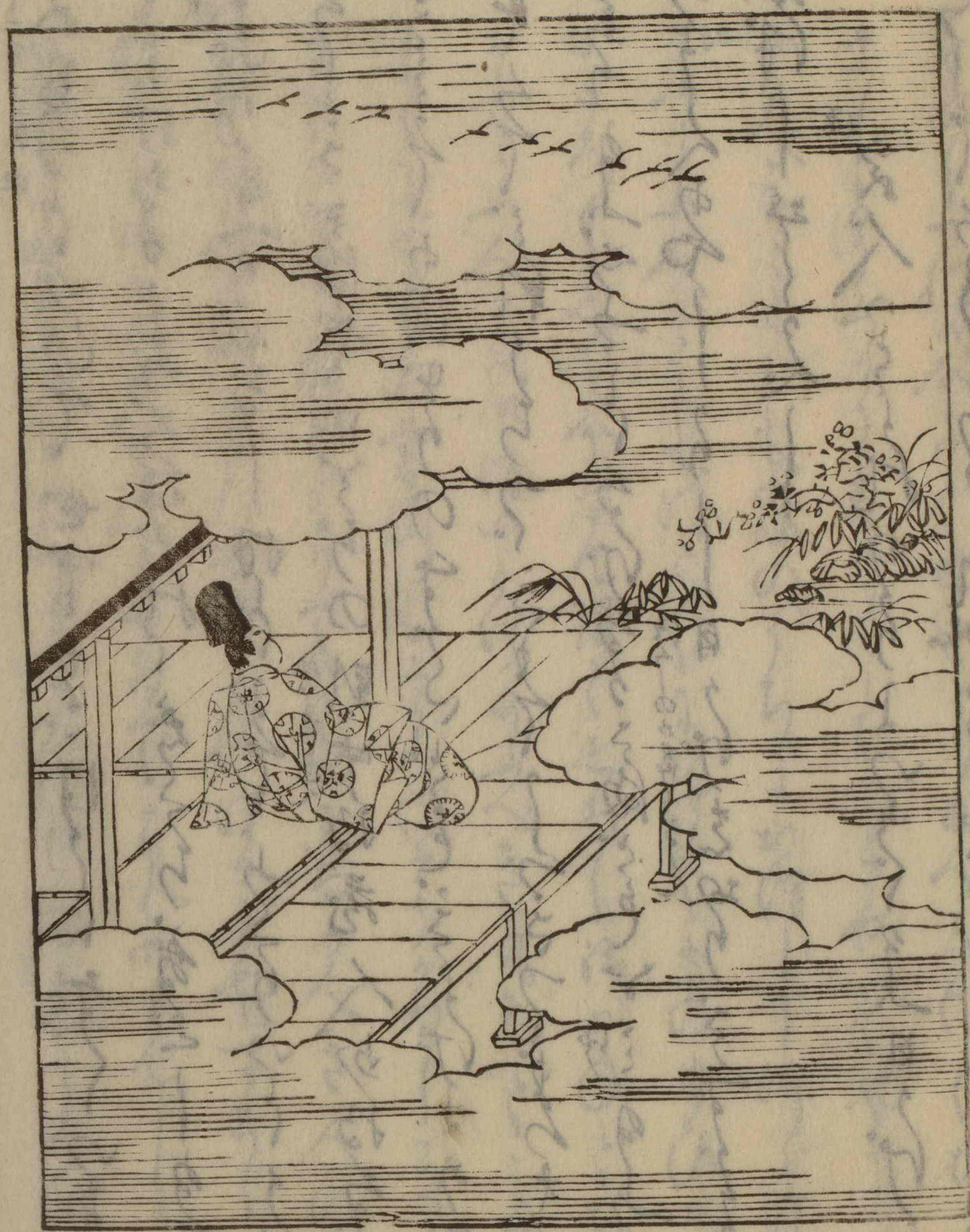
それと中のへが、それ（源詞）もかりそめなしず、命なかき
人ぐにも、さやうなることれたるすくなかりける。
男づしの口おしさまこそ、おこそこそはかども
ひろげ給いめなどの給、（地）なまごとまつけても、遊び
がたきけれろよもされつまし、そ、ましこと
いたうものなひ出ぬまゝ、まゝれつゝ時（かしこまず）鳥のかのう
まけなきたるも、いたまたりてゝと字人へぐなしず
（源）なき人を志のぶゝ宵の村毎にぬれてやる
つゝ山時鳥、とていとゞそをちなゞめ給、大将
（夕）時鳥きゝつてなん恋のもれたち蓋を
今ぞさりと、（地）女房などあけ（あのうち）くいひあけめられど、

とぐめづ。たゞ(タ)ねの君はやがて(内裏へ三)れとのねまさふしひ
給。さびし(深心)きれひとりねの心ぐるしかれぞ。時ぞ
りやうまさ(多)ふしひぬふ紙。おもきしよいいとけど紙
りし。おましのあたりのいたうもたちもあれぬ
などまつけて。ぜ。ぜしきことにもおほりまいと
あつきに。すゞしきうるまてあがめ給ふ池の蓮(はちす)の
さりなるをこゝ給ふ。いかまおほりうちと先(まづ)おほし
ぜしうふまおれぐきてつゞくとおいすう給ふ。
目も蓋まなり。目ぐしの声もあやかなりけり。
此前のなぞしこのなぞへをひとりのみこゝふる
もげまぞかひなりけり

つれぐとつゞるきくゝ寸夜の日をかぐと
がましき虫の声かれ。虫(地)のいとゞおほうとびちがふも
夕夜(せきでん)よほうとんでと。側のゆうともがうすぢ
よのこくちなれぬへり
よろせしろほうとゝてもうしきは時ぞ
ともなきせなりかり。七月(地)七日も。側よりもうろ
こくおほく。はあそびなどもしきまでつれぐに
なぐめくしぬて。星合(かしあひ)ころ人もなし。まぐ衆ふ
うし。ところおきねぬひて。素だをしあけぬへ
ゑに。前載の家いとしげく。ゆくどのゝ戸よりと代
まてこゝはこゝなれバいでぬて

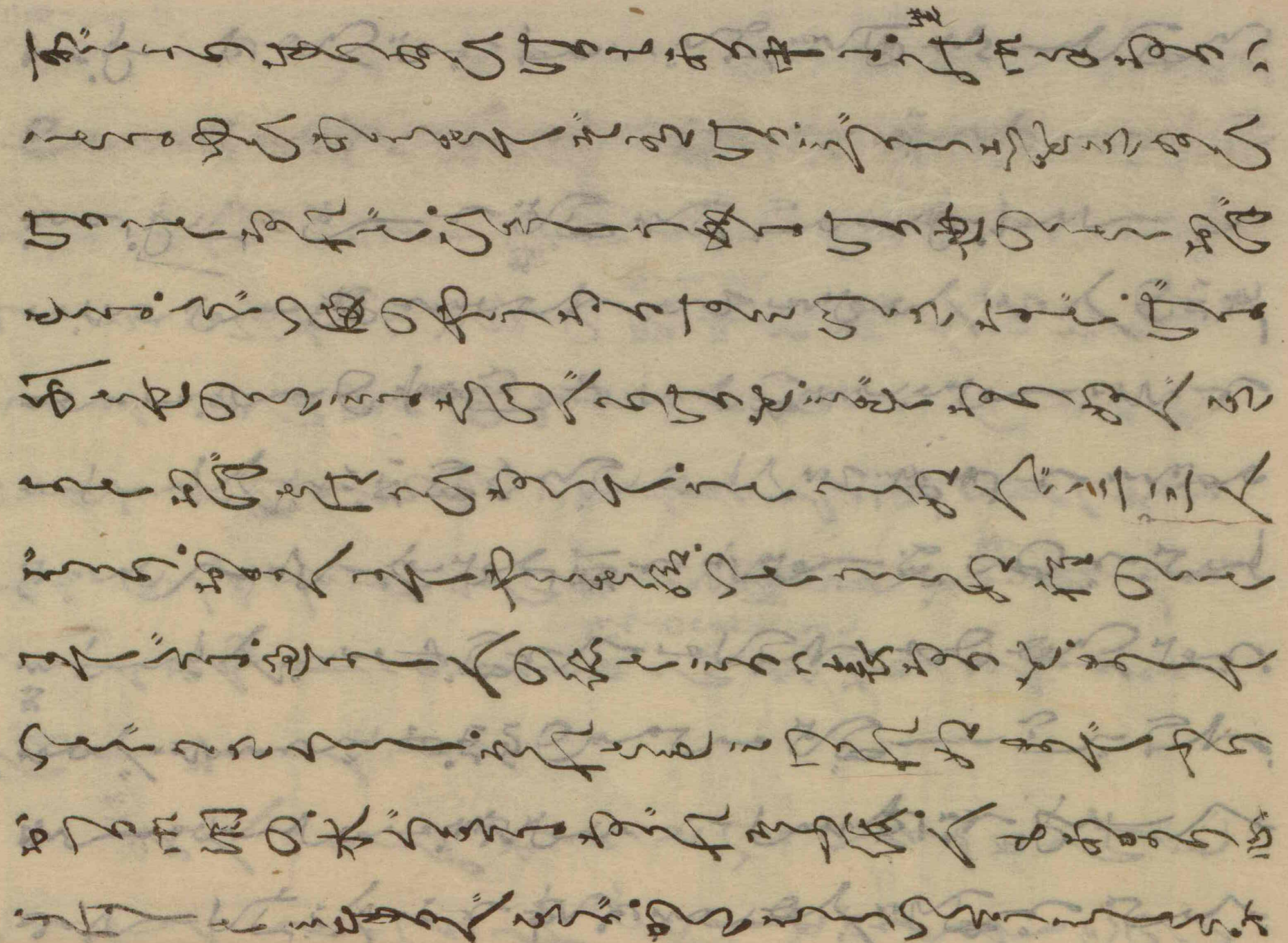
七夕のわかせは雲のよそにまとてまれの色
よなぞ垂そふ風の音さへとゞなるぞなりけ比
しも此法事のいとなまとて川いとちどろは
まぎらはしげなりいまとてへにけり月日よと
ゆげすまもおきれてありしくしぬふ此正目
まはりしも此人ぞ此いもねして此男陀羅
などなふぞ供養ぞさせぬふ例の霄のれとこなひに
此手水まいらすう中ねの志の扇に
武こゝろ洞はきはもなき袖をそふをばなまれ
まてといふんとうきつけうをとりてこゝまひて
人こゝろ秋方もまゝ必ゆけどなりおほうる

洞ありけり。地とうきそんなふ九月に成て九日ひる
なほひとうきくをしらんじて
　　係　もちとまとまおしきれ和つゆもひとり
多もとまうる秋かれ地秋五月もちうくもしぐれ
がちなるに。いとゞ係ノなぐめなひて。ぶん雲の色の気色
などもえもいはぬこゝろぼそさまに何ぶりしうぶく
ひとりぐちなり寸。雲ゐをつゝる鴈のつぎさもうら
やましくまもしれなふ
　　係　大雲をうよふまほろし夢まぐまえしらぬ玉の
り来ぐるよ。なまぐしにつけてもまぎれずのこ
れ日まそへてなほさる



十二月ノクリ 地
大臣なくなりて世中そこはかとなくいまめ
かしげなること、おほく〳〵なりて、むげにしなりて
詞へ まいりたまへりけるほどにまかりて、うちつゞきうけ
うしろさき角や、それとちの頭中将、蔵人少将など、
さまざまにて、あはれなりのすゞしげ、さまさげきめや
をかしそ、これうちつゞきまてうしづさつ、まちたま
ふりおふさまにちなげなる海どもを、こゝあはま。
いれ人おやしくりし目のかげたおり、さすずり
故はしけるべし
詞 文人はらうれおりていそぐ日かげをも
わくらしつられ、としせばうて、そのび

もぐしつれが今いと世をさりぬべきほどちかく
見しまうくるま。長なかことつきせぎやうく
さるべきことども。此心のうちにおぼしいけて
さふふ人ごとにもほどくまつけてものゆひなど。
おごろくしく今なん限としるし語りほどちふ
さふふ人ごとにはほいとげぬべき気色とこそ
まくまとしの嘗ひもこうほそうかるしきこと
うざりなし。落とまりてくるまるべき人の此文
どもやれはおしとおぼ(ほ)されけるまやすうしづ
のうし語うるを。もれくつゐでりけんじつけ
てやせぬひなどするまかれ其面志ころほひ。



まれはぞしやつとめて
　　源　たぞの山越(こえ)ましく人とたたふとて弥をうつは
れまどふかれ　　地　さふしふへぐも　まほまましえひ(久ら)さ
ひろげねど　それとほのぐこゆりに心まどひども
とろかましず　　源心　此世ちがしをとりぬ　　源ナイ　ほけれのほど紙
いとじとそしけるまくまかい(生ノ)の人家去の葉げは
そのありよりもをきあへぬかなしさやしんかた
なしいとうたていま一きほのれこうろまどひもめく
しく人ワろく女ぬべかれがよくもこ給ふで　二面
やうなうきぬへるうたたしは
　　源　うきつめてこうもひなしましほ筆おなじ

雲ゐの鮑とをなれど地とうきつけさせまして、これやみせ
給ひ、此仏君もことしだらりことてもとなばきば
まや常ならもことる揚秋のふぐなどありれ
ばすゑ、むすゑなどことしひねがふも仏乃
きて給ひんことくちしいてし、雲いたうふりて、
まめやかに川もりなり、導師のまゐげ家をば
まへまめして、さらぐきなどつねの作法よりも、
さしけせまて、ことなろくなど給ひす、さしごろ
久志く来りなばやけるも仕て、院にもかくなれ
たる此等師のうしらはやうしいろかけまてさふ
らふも、長になばさる、例の家たちに遅りなどのまる

ありあけの月の梅の花のもとにたちよりて
雪のまがきにやどれるかをとめ遊びちごもる
ものをぬべくれど雪にまぎれもむもびて
ぬぐさ山ちかきへいぼるうぐいすぞ
ものをもとめ侍のこづきのみぐるま
はまでもとめ侍のまつ雪のうちにうぐいす
梅をうぐいすてんれ入し

等作

あ世の春こうべをもとめ侍ぞ
名とともよりぬるへいぬ
源氏仁和ノ日ヤ上ノ宮ニ
らいで日でもめるれ
くらひてぞうぐいすぞ

ひの俗いおひなう明もとゞめぎりなり。年暮ぬと
おぼすも心ぼそきるつ（白羽）のなやらんに。（とく）さく
るべきことなるつぎ後をさせんとおしつまあり
き給もおしきれありさまに（添ふ）こぎしんことなる
げるものびがたし

（添）拠さふとすぐる月日もしぬまうしも
我世もそふやつきぬるつ（地）（正月ノ）いたちの日どれことつね
よりことなるべくとせきてさせぬふこゝろち
だにのれひきぞもれしれぐのろくどもなどに
なりおぼしまりけそとぞ

69038
6AP78